

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所  
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205  
Tel. (045) 671-1109  
振替 00200 - 1 - 47369  
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp HP : http://church.jp/naka/  
発行者 なか伝道所／編集委員会 (題字 松橋 順)

## 宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日(第1・第3・第5)  
午前10時30分より

## 第200号 寿に立つ ①

皆様のご支援で「ことぶき「なか」だより」第200号を発行できました。  
改めて感謝申し上げます。

200号、201号では、なか伝の大切な宣教方針にも関わる寿の町で、  
何らかの活動をしている、またこれまでに活動してきたメンバーに、主  
な活動内容と、なか伝とのつながりについて記してもらい、もう一度寿  
について考えたいと思いました。

「わたしはまことのぶどうの木」

武井 昭代

このぶどうの木、とてつもなく巨  
大で生命力にあふれている。樹齢な  
ど人間には測定不能である。

なか伝も枝の一本として寿の町の  
中へ蔓(つる)を伸ばし、葉を茂ら  
せている。葉っぱの数は三十枚足ら  
ずで他の枝と比べると多くはないし  
蔓(つる)の長さも十分とは言えな  
いが、光をたっぷりと浴びて、精一  
杯伸びている。

私達全ての葉っぱを紹介する訳に  
はいかないが、ざっと紹介してみよ  
う。大小数枚の葉っぱは中村橋にい  
た頃から福祉作業所と老人クラブの  
昼食作りを数か月に一度ずつ、世代  
交代をしながら続けている。その他  
にある一枚は学童保育、ある一枚は  
診療所、別の一枚は寿地区センター  
のスタッフとして働いているし、母  
国で貧しくさせられて止むを得ず来  
日した外国人労働者のためにカラバ  
オの会を立ち上げた大きな葉っぱに  
続いて、現在も濃(こま)やかな支  
援をしている葉っぱもいる。

もちろん全ての葉っぱが寿にいる  
わけではなく、いわゆる一般社会で

働いていたり、作業所のメンバーと  
して作業している葉っぱもいる。ま  
た自分の仕事だけでなく、核問題、  
差別問題、被災地支援など様々な活  
動に参加して理事とか委員などの責  
任を負っている葉っぱもいる。

その中で互いの情報交換は欠かさ  
ず、学び合うことを常に心掛けてい  
る。

三十数年の間には小さかった葉っ  
ぱも大きく立派な葉っぱに成長し、  
次の世代の小さな葉っぱも背伸びを  
している。たまには虫に喰われて活  
動休止に追い込まれる葉っぱもある  
が、体力回復と共に活動再開。その  
間、他の葉っぱは折り合い、補い合  
いながら復活の時を待っている。

しかし残念ながら台風や大雨で吹  
き飛ばされたり流されて行方知れず  
になってしまった葉っぱもいる。ま  
た『葉っぱのフレディー』のように  
役目を終えて、この大きなぶどうの  
木のでっぺんより更に上へと呼ばれ  
ていった葉っぱもいる。

週の始めの日曜日になか伝の鍵を  
開けたり、音響の整備や週報その他  
のプリント、聖書や賛美歌の枝折(し  
おり)、コロナのために消毒や換気  
など様々な仕事を分担して、滞った

り抜け落ちたりすることなく、帰ってくる葉っぱや訪問者を迎える。

なか伝の葉っぱ達が元気でいられるのは大きなぶどうの木につながっていることと、それを支援して下さる方々のお陰であることを忘れてたくない。

### 寿町におけるボランティアと

なか伝について

山口 雅典

初めてなか伝を訪れたのは約六年前になります。炊き出しでよく会っていた篠原さんに逢いに行つて今に至ります。

ボランティア活動は炊き出しに始まり夏祭りの準備。内容はヤグラ組

み、電気配線などを主に担当しています。又、越冬なども同じ事が多い気がします。年末年始には忙しく朝早い時間から様々な準備に追われ、ボランティアさん達のお力を借りながら和気あいあいと作業します。

今年も三年ぶりに寿町で夏祭りを開催することが決まっています。新型コロナウイルス感染症対策のため、規模と期間を縮小して開催します。

今年も電気配線担当に汀さんが加わって頂きます。配線や電球、そして提灯など器具類の確認作業も多く大変かと思えます。

多数の団体、又遠方などからいらして下さる学生さんや一般のボランティアの方々に感謝しています。

### (空の地面)

## えーとねえ

男児 「アッ、飛行機雲！ あれって飛行機が描いているんだよね」

女児 「違うよ。天使さんがお空の地面に描いているんだよ」

私 「ええーっ？ お空に地面があるの？」

男児 「あるに決まってるじゃん」

女児 「なかつたら、天使さん落っこっちゃうでしょ」

私 「へえー、知らなかった！」

(男児、女児ら才)

### なぜカラバオの会に

かかわるのか

牧野 美登里

なぜ、カラバオの会にかかわるようになったのかと問われても、大きな理由があるわけではありません。

六十五歳で仕事が終わわり、渡辺英俊さんに報告したところ、誘われました。「水曜日午後七時から委員会があります。今かかわっているケースがすべてテーブルに乗ります。出席してください」と言われたことを覚えています。

カラバオの会は、英俊さんたちの力で知名度があり(もちろん歴史も)、問題を抱えた外国籍の方から相談の電話があつて繋がります。

相談者の国籍はバラバラですが、特にイスラムの方たちとは、一九八九年、入管法に「不法就労助長罪」が新設されたことにより、繋がりが多いです。(この時カラバオの会は地区センターに間借りしていたので、地区センターの電話が鳴りっぱなしだったそうです。)

カラバオの会の成立当初は、寿にも多くの外国籍男性労働者がおられました。今は姿を見ませ

ん。反対に今は女性の方たちがヘルパーとして働かれているのを見かけます。

日本で二、三十年生活し、配偶者を得て生活する方たちからも相談を受けます。やはり、言葉の壁や情報不足のため、職場でのトラブルや嫌な思いを抱えていらつしやいます。

藁(わら)にもすがる思いの人々と、どれだけ一緒に考えられるか、相談事を解決できるか、心しながら相談を受けて、進めています。

外国で生活するということのむずかしさを感じていますが、一緒に前を向いて、一緒に生活できたらいいな、と思つています。

外国籍の方が、日本で生活することに不安を持たない社会になることを祈ります。



## 「学童」の子どもたちと関わって

渡辺 幸子

高齢者が多く住み、福祉の町と言われるようになった寿町の中に、子どもたちの集まる場所「ことぶき学童保育」（寿の中では「学童」と呼ばれています）があります。「学童」は、子どもたちのたまり場。いつでも、だれでも、自由に来られる場所。そして、自由に過ごせる場所です。

ここに週一回、顔を出すようになって三十年が経ちました。最初に気になったのが子どもたちの食生活です。学校に行っていない子どもたち

ちが、昼食代わりにカップラーメンやスナック菓子を食べていたからです。その様子を見て、おやつ作りを始めました。作るのは、うどん、焼きそば、おにぎり、ホットドッグなど、お腹にたまるものです。

「今日のおやつ何?」。学校から帰ってきた子どもたちが私に声をかけます。「お手伝いするよ!」と言ってくれる子どもと一緒におやつを作ると、材料を切ったり味見をしたりする中で自然と会話が生まれ、子どもとの距離が縮まります。(残念なのですがコロナ感染防止のために、現在は原則として私だけで作って

## まど

なか伝道所は、発足当初から外部の皆様からの支援金でその活動を支えられてきました。今回「なかだより」二百号を迎え、皆様「なかだより」を通してなか伝の活動を知り、献金して下さっている事を私たちは今一度考えることが出来ました。改めてお礼申し上げます。

そして、発足初年度から支援をして下さっている個人・教会の皆様から三十五年間の長きにわたり、活動を応援していただいていることを思うと感謝しかありません。

中村橋から聖書を読んでいた時

代、そして寿町から聖書を読んでいた時代。時代と歴史と社会の中で、私たちは寿町で礼拝を続けながらイエスの活動を思いめぐらしています。今は牧師がいない教会の中で、みんなで試行錯誤しながらイエスの活動を学んでいます。時に、問題のある現場の真ただ中にいるとどうしたら良いか、頭が真っ白になり、イエスがヒントをくれたらよいなあ、と思うこともしばしばです。ご支援下さっている方々とそんな出来事を語っていただけたいなと思いつつ:

(鈴木弘美)

ます。) 台所は廊下の奥まった所にあって狭いのに子どもたちはここが好きで、かくれんぼの隠れ場所になったり、中学生の女の子たちが恋バナしたり、ひとりになりたい子の避難場所になったりしています。「新しい彼氏できたんだよ」「今日、学校でイヤなことあってさ」・・・そんなことを話してくれることもあって、子どもたちの生活や気持ちがちよっとだけ見えてきます。

一般の学童保育は小学生が対象ですが「学童」は赤ちゃんから中学生までOKなので、弟や妹と一緒に来たり、母親が子どもを連れてきます。仕事をするようになった卒業生たちが、仕事帰りに顔を出すこともあります。小・中学生が小さい子どもたちの面倒をみる、卒業生が下の子どもたちと遊ぶ・・・そんな昭和的な縦割りの子ども社会が、ここではまだ残っている気がします。卒業生を含め「学童」に来たみんなに、「おやつ食べてね!」って声をかけます。

イライラしている中学生がお腹がいっぱいになると優しい顔になり、仕事で疲れた顔に笑顔が出ます。いつも私に反抗的だった子どもが「手伝ってやるよ」と、嬉しいことを言っ

てくれたりします。食事には、そんな魔法の力があると思うのです。子どもたちの優しさに後押しされて、今まで続けてきました。

昔はボスの存在がいて、時にハチャメチャなことをやったり、大人を手玉に取るようなこともしていたけれど、子どもたちをまとめて集団で遊ぶ。そんなギラギラした「寿っ子集団」がありました。寿というだけで差別され、学校に行けなかった子どもたち。そんな子どもたちにとっては、「学童」が学校代わりでした。いま差別はほとんどないと思います。でも、様々な理由から学校に行けなかったり、学校を休みがちな子どもたちはいます。ひとり親、低収入、生活保護、狭い住居、親の不仲・・・そんな環境の中で生活している子どもたちも多いのです。寿らしさは薄らいだかもしれませんが、子どもたちはしたたかに今を生きています。

週一回だけしか関わっていない私にできる事はほとんどありませんが、おやつの時間を通して少しでも子どもたちが笑顔になってくれたら、と思うのです。「学童」の他にも、生活館二階では「青少年広場」と「学



童」を退職された「のりたま」こと山笠井（やまのい）さんがやっている「勉強会」が開かれています。ほぼ同じ子どもたちが三つの場所を移動しているの、時には連絡を取り合いながら、それぞれの立場から子どもたちと関わっています。

最後になりますが、コロナのためにこの夏三年ぶりにおこなわれた「学童」のキャンプには、なか伝道所のメンバーがボランティアとして参加してくれました。「学童」の時間の中で伝道所のことを意識することはほとんどありませんが、地域の活動の中で顔を合わせる機会は多く、その度にいつも励まされ、力をもらってきました。きっと、これからも・・・



### 風景

私は、伝道所がことぶきに移転した一九九六年二月より、ことぶきと長いお付き合いが始まりました。実は、一九八一年四月に石油会社に入社した時、ガソリンスタンドの実習を受けましたが、その場所がここ、ことぶきでした。当時は、多くの人たちがいきかい、活気が溢れている反面、弱肉強食の世界のようで、大変なところだという感想でした。その後、伝道所が寿地区センターに助けられて、町に入ってみると、寿日の方々が、この町に住んでいる方々やこの町のために献身的に働いていらっしゃる。夏祭りの盆踊り、沖繩のエイサー、そして、越冬のとき、ひとりひとりの命を大切にすることを続けてこられました。ことぶきも高齢化が進み、労働者の町から福祉の町へ変容しようとしています。ひとを大切にすることを原点は変わらないと思います。これは、イエスの歩みとしての伝道所がここにある意味だと思います。コロナの勢いが止まりませんが、町の方々がどうか無事に、健康に過ごせますように。

（小笠原敦輔）

### 2021 年度支援会報告

収入		支出	
前年度繰越金	49,341	振り込み負担金	14,260
支援献金	371,500	通常会計へ	627,242
クリスマス献金	253,400	その他	0
利子	0	次年度繰越金	32,739
収入合計	674,241		674,241

**なか伝道所支援献金のお願いとご報告**

皆様からご支援をいただき、伝道所の運営が大変助かっています。心より感謝いたしますと共に、ここに二〇二一年度の年間報告、二〇二二年七月までのご報告をいたします。皆さまからのお支えは感謝をもって有効に使わせていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

### 編集後記

「なかだより」二百号、発行が遅れたこと、お詫び申し上げます。

弥生